

アリストテレスにおける 発見的探究と何であるかの論証

千葉 恵

1. 発見的論証的探究論とディレンマ

アリストテレスは『分析論後書』で論証科学の理想的な構造と発見的探求の統一的、包括的理論を構築するという全体の構想のもとで、事物における因果論的知識をもたらす方法として論証の理論を展開させている。彼はそこで一見二つの両立しがたい目標を実現すべく私が「発見的論証的探求論(a heuristic demonstrative enquiry theory) (HDE)」と呼ぶものを構築している。その目標が抱えるディレンマを「包括性厳密性ディレンマ (the comprehensiveness strictness dilemma) (CSD)」と呼ぶ。一方、もしひとが論証の厳密な条件を維持するなら、探究の射程は脅かされる。他方、もしひとが探究の包括的な理論を追及するなら、論証の要求はその一貫性と一般性において過剰な重荷となる。アリストテレスの探究と論証の架橋的な理論は包括的かつ統一的であらねばならず、しかも可能な最も広い領野において科学的知識を産出することのできるものでなければならない。

双方の目標を同時に満たすことができるなら、これら二つの計画は範囲と機能双方において互いに強化しあうであろう。私は彼が HDE を進展させることによりこの野心的な構想を追求していることを明らかにする。この構想は具体的には (1) 何であるかの因果論的編成、(2) 実体の論証可能性の追求、(3) ヌース (洞察) による感覚知の補完、等を通じて遂行される。

2. 探求項目の包括性と論証言語によるその厳密化

探求の対象は世界におけるあらゆる現実の事物、事象であり、その包括的な探求論が構築される。彼は探求され、学習されかつ知られるべき諸事物として四つの項目を同定している (89b24)。

- ・ [I a] 事実 (*to hoti*) と [I b] 理拠 (*to dioti*)
- ・ [II a] 存在 (*ei esti*) と [II b] 何であるか (*ti esti*) .

これら四項目は知識を求める探求の項目と射程の点で汲み尽くしており、網羅的である。探求と発見の同数性に基つき包括性が主張される。「われらが探究してそして、発見することにより (*heurontes*)、知ることはこれらのものでありこれだけの数である」 (89b36f)。換言すれば、何であれ発見されうるものは探究のこれらの四項目に尽きており、そしてそれらの一つに分配されうる。これらの四つの項目は知識を産出する活動のいかな

る事例をも汲み尽くすべく網羅的に想定されている、たとえそれが自然学者の自然探求であれソクラテスの道徳的探求であれ。確かに、探求のいかなる成功理論も可能な限り包括的でなければならないので、探求の可能な対象のあらゆる様式が考察されねばならない。実際、II 巻において言及されている探求の対象は「山羊鹿」のような想像上の存在者や「雷」のような自然現象、「誇り」のような道徳上の存在物や「三角形」といった数学上の存在物、「落葉」のような生物学的事象、そして神学上の存在者「神」も含まれている (cf. II 1, 7, 8, 13, 16)。これらの例から、アリストテレスはとりわけ広く彼の構想を描いていることが実によく見て取れる。このように、彼はあらゆる存在者を包摂すべく包括的探求論を構築する明白な計画をもっていたことは明らかである。彼の四つの基本的な問いは、かくして、われらがどの疑問形を用いてであれ尋ねることができるいかなるものをも包摂すべく意図されている。

この枠組みのなかで、アリストテレスは探究の対象を基礎づける因果論的連関を探索する。彼はそこで発見的探究の言語と論証の言語を関連づける。そして論証の彼の一般的な形式に依拠しつつ、一つの推論のうちで中項を根拠として同定する。こうすることによって彼は二つのトラック [I][II] を統一している。

われらは、[I a]「事実」または[II a]「それが端的にあるか」を探求するときはいつでも、[I & II a]「はたしてそのものの中項はあるかそれともあらぬか」を探求している。しかし、われらは「事実」か「存在」を、それは[Q1]「部分的に」または「端的に」ということであるが、知るにいたり、そして今度は[I b]「理拠」と[II b]「何であるか」を探求するとき、そのときはいつでも[I & II b]「その中項は何であるか」をわれらは探求している。私は「事実(*to hoti*)」によってまたは「あるか(否か)(*ei esti*)」によって「部分的に」そして「端的に」と言う。(i) 一方で「部分的に」によって私は、例えば「月が蝕を受けているか、それとも満ちているか」を探求する。何故ならこのような場合、それは何かであるか、何かでないかを探求しているのだから。しかし(ii)「端的に」によって、私は「月または夜があるかないかを探求している」場合を言う(89b37-90a5)。

アリストテレスは、事物、事象の存在論的な特徴から[I & II]による探求[I]と[II]の理解を提示している。彼はそれぞれの問いを明確にすべく規制[Q1]を提示している。事実性と存在に関する問い[I a]と[II a]は、一方、何ものかのそうであることの実に関わり、第二はその存在に関わる。アリストテレスはこれらの問いを構文上(syntactically)二つの副詞的規制それぞれ「端的に」と「部分的に」を導入することによって、[II a]存在の問いを[I a]事実の問いから体系的に区別している。この区別は事実の問いがあるのと同様に、存在の問いがあるということを確認するために言語上の観点から設定されている。例えば「夜」は「暗闇は空気に属するかどうか」と再構成されるでもあろうが、「端的

に」と限定されている(90a5)。何故なら彼は、ひとは日常的に「夜」や「蝕」(90a26)という単一の言葉を用いて存在を尋ねるということに注意を向けつつ、言語上の現象に固着しているからである。この文脈において、Sの内容は問題とはならない。D・チャールズの言うように、当該の区分は「問いの形式に依存している」⁽¹⁾。いかなる事物、出来事も単称項により言及されうる限り、ひとは存在の意味において「Sはあるか」を尋ねることができる。これは、端的に、Sは存在するか否かを問うことである。そして「Sは端的にあるか？」は「Sは白であるかないか」(89b34)と区別される。

探求者はこれらの論点の一方を他方と混同すべきではない。これらの限定の導入がなされているのは、発見的知識の異なる型を分離すべく、トラック[I]はトラック[II]から区別されねばならないことを示すためである。[I a]事実の知識は探求者をして[I b]何故この事実は成立するのか(理拠)を尋ねるよう促すことは明らかである。ひとは[I a]事実の知識に基づき[II b]何であるかを問うことはできない、何故なら前者は部分を伴い分節される項目だからである。同様に、それが存在するという[II a]存在の知識から[II b]それは何であるかを尋ねることは自然である。しかしながら、これら二つのルートにおいて同時に[a]と[b]双方を発見することを妨げるものは何もない(e.g., 93a17, 35)。一般的に、語「発見」がそれについて語られるいずれの事物、事象も問題となる探究の対象である。そして[II a]存在が発見される時、通常その発見はその存在する対象の属性や根拠の発見を伴っている(cf.93a28)。そのことは複合的な事実の問いとして再構成されうることを示している。ルート変更が可能であるにしても、発見される限りのものが探求の対象であり、その項目の数は四つであり、これはそのために発見的探求論が構築されうるものの範囲である。

アリストテレスは[I & II]の導入によるトラック[I]と[II]の統一的な理解を提示する。

[a]

[b]

[I] Sは部分的にPであるか否か?→何故SはPであるのか?

[II] Sは端的に存在するか否か?→Sは何であるか?

[I & II] 中項Mは存在するか否か?→その中項Mは何であるか?

中項によって表された推論または論証は発見的探求の言語のなかに組み込まれる。彼は一つのトラックを他のトラックに還元するのではなく、むしろこれら二つのトラックは確実に真正の通り道を指示していると捉えている。これは何故ならそれらが、[I & II a]から[I & II b]へという、背後の探究過程によってそれぞれ保証されているからである。彼は[I]と[II]の包括的な対処法を提示すること、そしてそのようにして、探究の統一的な過程の観点から、それらを[I & II]によって秩序づけることを試みたのである。

[I & II a]と[I & II b]を導入したことによって、アリストテレスは[I]と[II]のそれぞれの項目[a]、[b]はひとつの統一的探求における同一の段階を構成すると捉える。これらのトラックの同一化は項目「事実」「存在」「理拠」「何であるか」が何を意味表示するかについてのアリストテレスの理解を提示している。中項、すなわち根拠の存在を知るこ

となくして、ひとは事実の知識または存在の知識を主張する資格はない。そして中項「M」によって意味表示される具体的な項を知ることなくして、ひとは理拠の知識または何であるかの知識を主張する資格はない。探求の四項目の理解に対するこの制約は、探究の論証的知識に至る彼の全体的な計画における二つの目標を満たすという彼の理念に由来している。彼の関心は「いかに描写された型の探求が彼の証明理論に適合するか」⁽²⁾にだけでなく、いかに彼の探究論は包括的かつ統一的な探求論を構築すべく彼の証明理論を利用することができるかにも注がれている。論証が科学的探索において何らかの役割を担っているのであれば、それは公理論的演繹体系として理解される論証科学の内部で、前提から結論への必然性の単なる伝達者となるだろう。論証がより大きな力を持つのは、それが世界、それは疑いなく発見的探求の対象であるが、その世界に組み込まれている説明的構造を反映する限りにおいてである。

当該論証の発見により統合トラック [I & II] の導入が目指されている。一つの中項 (*meson*) があることを発見した後、探求者はその中項 (*to meson*) が何であるか、すなわち何が具体的な中項であるかを求める。アリストテレスはこのアプローチを蝕のケースにおいて明らかにしている。彼は「A[蝕]が C[月]に属していることが明らかである時、次に何故それが属するのかを探求することは、B[=M]は何であるか、はたしてそれは光の遮蔽か、月の回転か、消滅かを探求することである」と言う(93b3-6)。すなわち、[I & II b] 「その中項[M]は何であるか」という問いにおいて、彼は「Sは何であるか」を尋ねることによってMは何であるかに向かわせている。一方で[II b] 「何であるか」の問いは今や因果論的なものとなりそしてSをしてSは何であるか[それがそれであるもの]たらしめる根拠を尋ねることと同一視されるが、[I & II b] の問いはSの存在の適切な根拠としてかSP [SがPである]という事実の適切な根拠の問いとして看做されている。その適切な応答は何故SPなのかという理拠を説明する、そして同様にSが何であるかを決定する。[I & II b] のこの同一化の故に、われらは何であるかと何故かは同一であると語る資格を得る。[I b] 理拠と[II b] 何であるかのこれらの問いによって、探求者は実際[I & II b] を尋ねている。

アリストテレスは協和音や蝕の諸事例に言及することによって「何であるか？」と「何故か？」の問いの同一性のための帰納的な議論を展開し、そして当該の根拠がそれぞれに内属する探求の対象の三種を区別するために存在論的な規制[Q2]「端的に(*haplós*) vs 或るもの(*ti*)」を提起する。

何故なら中項[M]は根拠であり、あらゆる場合にそれが探求されるからである。「それは蝕を蒙るか」、「何か根拠はあるかないか」。「何かがある」ということを知ったうえで、われらは「それ[M]は何であるか」を探求する。何故なら中項は[Q2]これはまたはあれであることの根拠ではなく、(So) 端的に実体であることの根拠であるか、または(Po) 端的にではなく、その自体的な諸属性の或るもの(*ti*)であることのか、

それとも (Ao) その付帯的な属性の根拠であるかだからである。ところで私は「一方、端的に (*to men haplós*)」によって基体、たとえば月、大地、太陽、三角形を意味している。それに対し「他方、或るもの (*to de ti*)」によって蝕や等辺、不等辺、[地球が] 中間にあるかないかを意味している。何故ならこれらのあらゆる探求において、それが何であるかとそれが何故であるかが同じであることは明らかだからである。

「蝕は何であるか」、「それは地球の遮蔽による月からの光の消失である」。「何故蝕はあるのか、或いはむしろ、何故月 [*hé seléné*] は蝕を蒙るのか」。「何故なら地球の [*tês gês*] 遮蔽することにより光 [*to phôs*] が消失すること [*to apoleipein*] の故にである」。

「協和音は何であるか」、「それは高音と低音の間の数の比である」。「何故高音 [*to oksu*] は低音 [*to baru*] と協和するのか」、「それは高音 [*to oksu*] と低音 [*to baru*] が数の比 [*to logon arithmon*] を保つことの故に」。「はたして高音 [*to oksu*] と低音 [*to baru*] が協和することはあるか」、「諸数におけるこれらの比はあるか」。われらはそれがあるということを把握した後、「それではその比は何であるか」と問う (90a6-23)。

このように、彼は規制 [Q1] 「端的に (*haplós*) vs 部分的に (*epi merous*)」の導入により、言葉における単一の使用と複合の使用との間の構文上の違いに基づき、[I a] 事実と [I b] 存在の探求を区別し、さらに、規制 [Q2] 「端的に (*haplós*) vs 或るもの (*ti*)」の導入により、存在論上の制約に基づき、探求対象を実体的な対象 (So) から自体的 (必然的) な対象 (Po) と付帯的な対象 (Ao) を判別する。

規制 [Q1] 「端的に (*haplós*) vs 部分的に (*epi merous*)」: 言葉における単称の使用と複合の使用との間の構文上の違い → [I a] 事実と [I b] 存在探求の判別。

規制 [Q2] 「端的に (*haplós*) vs 或るもの (*ti*)」: 存在論的な差異 → (So) 実体と (Po) ・ (Ao) 自体的 ・ 付帯的属性の判別。

規制 [Q1] は言語次元で機能する一方で、規制 [Q2] は実在の次元で存在論的な制約として適用される。この存在論的規制 [Q2] は言語的規制 [Q1] から区別されるべきである。一方 [Q1] は探求者がそこにおいて問いを提示するその諸様式に関するものであり、[Q2] は見出された対象がそこにおいて相互に異なるその諸様式に関するものである。従来、Philoponos から Zabarell, Waitz, Ross, Barnes, Charles に至るまで [Q1] と [Q2] が区別されてこなかったために、多くの解釈上の混乱を引き起こした⁽³⁾。

II 2 において「S とは何であるか」という伝統的なソクラテスの問い、本質的な定義を求める問いの因果論的な編成が遂行されている。因果論的な解釈は [I & II b] に基礎づけられたものとして、[II b] 「何であるか」と [II a] 「何故であるか」の問いの同一化によって可能なものとされている。推論用語における中項は定義を構成すべく利用されている。これを「何であるかの因果論的転回 (又は「編成」)」と呼ぶ。しかしながら、「何であるか」の問いと「何故であるか」の問いに答える方法の相違には重要な対照があり、彼の言語使用上の正確性に反映されている。「何故?」の問いが答えられるとき、選ばれた項は

定冠詞「それ(*to, hē*)」によって先行されている(cf.90a7-21, 93a37-39, 93b10-11, 94a4)。知識を生み出す推論の形成における項の選択は実在における包括的で厳密な探求論の途上の過程を反映している。実際、ひとは、一つの推論を形成することなしに、当該の中項を見いだすことはできない。論証における明白な定冠詞の付加、定義におけるその欠如は、一方知識を産出する推論は言語上の活動に留まるが、他方推論上の諸項の選択に基づく定義は直接的に世界における事物、事象についてのものであるということを示唆している。以上が CSD の一つの角である包括性への問いに対する一つの応答である。

3. 発見の機能としてのヌース（洞察）の導入による CSD の一つの角の解消

しかしながら、これまで脇に於いてきた包括性厳密性ディレンマ(CSD)のもう一つの側面がある。もし発見が感覚知覚によってのみ実現されるとするならば、ひとは探究を通じて厳密な(*strict*)知識に到達することはできない。探求においてただ感覚知覚だけが唯一の探究において利用可能な認知機能であるなら、ディレンマのもう一方の角の餌食になる。アリストテレスの探求の全体的計画においては、すべての探求は本質的に中項を巻き込むものである。彼は「その中項が知覚し得るものであるケースが、探求は中項についてであることを明らかにしている」と述べる(90a24)。彼は月の上に立っているひとによって見られる月の蝕の感覚知覚の例を挙げることによってこの主張を提示する(90a26)。これは、その現実世界への方向づけを示しつつ、彼の HDE における実際上の探求者の場所の重要性を例証している、もちろん当時においては思考実験であったのではあるが。この場合、もし観察者が月の上にいたなら、感覚知覚の事柄として光の喪失と地球の遮蔽の双方が生起していることが同時に明らかになるであろう。というのもこれらの生起の双方は、その特権的位置から、知覚可能な事実であることを証明しているからである。たとえそうであるにしても、しかも重要なことに、事実上(*in fact*)遮蔽を把握することは、それを光の喪失の根拠として(*as*)把握することと同じではない。観察された事実はさらに根拠として把握されるべき何ものかを要求している。

後者即ち何かを根拠として把握することは、知覚機能よりもむしろ思考を、洞察機能(*noēσαι, theōrein*)を巻き込むが、それは、実際、普遍的な命題を生み出しそしてそのように固有な論証の身分を獲得させる(cf.71a1, 79a24, 81b2, 86a29, 88a3, 16, 89b12)。ちょうどニュートンが木からりんごが落ちるのを見ることによって重力の法則を掴んだように、「知覚することによってわれらは普遍を知るようになる」(90a28)。アリストテレスが語るように、「洞察力(*ankinoia*)は気付かれない時間のうちに中項をヒットする才能である。例えば月が太陽に向かって明るい面を持つことをひとが見れば、直ちにこれが何故であるかを理解する場合のように」と彼は言う(89b10f)。感覚知覚によって媒介されることにより、「洞察対象(*noētē*)である普遍」は他の心的力能によって把握されるだろう(86a29)。彼が頻繁に同時発見について言及した理由は、二つの異なる認知機能が同時に含まれるからである(90a27, 93a17, 35, 88a16, 89b12)。これらの特徴を伴って同時に論証を把握する

ことを妨げるものは何もない。他の心的機能を導入することによってのみ CSD を乗り越えることができる。

実際、アリストテレスは「事象がこのように適切に理解されたので、天文学の諸論証が発見された (*heurethêsan*)」(46a20f) という文脈のなかで、論証の発見について述べている。これは驚くべきことではない、なぜなら中項を発見することは論証全体を明らかにすることだからである。それ故に、われらは中項の知覚によってはわれらの探求を完成することはないであろう。われらは普遍の或る思考をもまた必要としている。

4. 定義と論証

探求の対象は世界のすべての事物に広がる。これは驚くべきことではない、というのも何であれ事物はアリストテレスのこれら四つの問いの一つによって吟味されうるからである。たとえそうであるにしても、彼の野心的な計画はアポリアに取り囲まれている。

喫緊の問いとして「何であるか」の因果論的解釈は正当化されるか、また [I & II a,b] による探求の四項目の彼の理解は事物や事象のどんなものにも適応させることができるのか、さらに実体の論証は可能かが立てられる。探求の対象に諸実体を含むかに関し心配すべき理由を与えられている。もし実体を包摂しそこねるならば、アリストテレスの HDE は包括的なものではなくそしてそれ故に失敗に終わるだろう。

幸運にも、アリストテレスは充分にこのありうる困難に気付いていた。彼は II 3 から II 7 にかけてこの問題そして他の関連する挑戦や難問に直面している。これらの章において、アリストテレスは、定義と論証双方とも厳密な知識獲得のための媒体であると主張するが、それら定義と論証のあいだの関係に取り組む。「S は何であるか」と「何故 SP であるのか」(つまり「或る基体は何であるのか」また「何故或る基体は或る特徴を持つのか」)の間の同一性に基づく彼の HDE は定義か論証いずれかの方法の内側でこれらの項目を統一しなければならない。アリストテレスは II 3 において [A] 定義と [B] 論証に関わる幾つかの難問に取り組むが、彼はそれを (1) それらの対象と項目、(2) それらが用いる述定、(3) それらの方法についての難問を提示することによって遂行する。

何であるか或いは実体の推論ないし論証を持つ可能性を究明することはアリストテレスにとって不可欠である。もし彼がこの究明に成功するなら、論証と定義は両立可能なものとなるであろう。それにふさわしく、彼はこの関連で一連の問いを提示している。

- ・いかにひとは何であるかを証明するか? (90a36)
- ・いかに定義者は実体或いは何であるかを証明するか? (92a34)
- ・何であるかの推論と論証はあるかあらぬか? (91a13)
- ・実体に即した何であるかの論証はあるか? (92a6, cf.90b19, 92b4, 93a2, 15, 94a15)。

彼が「実体」そして「何であるか」或いは「何であったかということ(本質)」を一つの文脈において提示し考察するとき、彼が何を達成しようとしていたのか(91a25, 91b9, 92a6)。なぜ彼はこれらの語句を HDE のうちで用いたのか。その応答はアリストテレスの彼の先

行哲学者たちとの関係にわれらを連れ戻す。

『トピカ』においてプレディカビリアの理論はソクラテスの「Sは何であるか」の問いに対する四つの可能な応答として構成されている。彼は当該の事物 S と S について述語付けられうる事物の種類のあいだに同一性の四つの型としてこの問いに対する四つの可能な応答に言及している。それは「付帯性」、「固有性」、「類」そして「何であったかということ」(本質)を意味表示する「定義形成句」の四つである。

これらすべては「定義的(*horika*)」と呼ばれる。これら四つの可能な応答はソクラテスの「Sは何であるか」の問いに対するあらゆる可能な応答を汲み尽していること、そしてかくしてこの問いに利用できる諸応答の相互に排他的な分類を提供することが想定されている(102a9)。例えば「勇気とは何であるか」の問いに対するラケスの答えは「戦場の前列で後退しないこと」であった(*Laches* 190e)。しかし、臆病さのゆえに足がすくみ動くことができないことがその根拠であるかもしれないため、この句は単に付帯的な勇気の特徴を意味表示しているにすぎない。

「本質(*to ti ên einai S*)」という句は、対話者の最初の答えに満足しないソクラテスが S それ自体を再び尋ねる状況において「Sは何であるか」の問いを再び問う試みから形成されている。これは文字通りには、「一体 S にとって S であることは何であったのか?」という未完了時制を伴うギリシア語の言い回しにより伝達されているものである。「Sは何であったかということ」はソクラテスが彼の「Sは何であるか」の問いにおいて求めるものをアリストテレスが再び定式化してロギコースにつき形式言論の次元で述べているものである(cf.1041a28:*hôs eipein logikôs*)。

アリストテレスはこの四つの汲み尽くしかつ排他的であるものの理論化に基づき、『トピカ』I 9において述定の十の範疇(*ta genê tôn katêgoriôn*)とそれに基づき存在者の十の範疇(*ta genê tôn ontôn*)を導出している。四つのプレディカビリア、十の述定の類・範疇、そして十の存在者の類・範疇のあいだの彼の区別はすべてソクラテスの「Sは何であるか」という問いのアリストテレスによる異なる様式における分析の結果である⁽⁴⁾。それらは弁証術の実践のための考案物であり、その実践は、「何であるか[を問うこと]なしに(*khôris tou ti esti*)」「はい」か「いいえ」を述べることによって答えられる疑問詞を用いて遂行される(*Met.* M 4 1078b26, cf. *Top.* I 4 101b28-36, VIII 2 158a14-24)。

ここでは[Q1]と[Q2]の間の区別で見てきたように、彼は言語上のレベルと存在論上のレベル双方を念頭におき、それらの間の対応を示す。「Sは何であるか(*ti esti*;)」の問いは言語上の問いでありそして「Sは何であるかということ(*to ti esti*)」という語句によりもたらされるその応答もまた言語上対象を同定することにより表現される(cf.90b4)。このタイプの言語上の活動は通常指示の役割を有している。即ち、「Sは何であるかということ」は実在を意味表示する。この言い回しを見いだすとき、言表により S を同定するという言語上の活動は実在において S が何であるかを見出すべく探求者を方向づける。アリストテレスは探究論における「実体は何であるか」をこれら同一の語句により伝達して

いる(91a25, 92a6)。この文脈における彼の関心はまさに実体は何であるかの論証が存在するかということである。

彼は意味表示の二重の機能 ([1] [2]) を提示する (これは分析哲学における mention と use の区別、語の意味と指示の区別にほぼ対応する)。カリアスは何であるかを意味表示する言語行為はまた一つの実体を、即ちカリアス彼自身を意味表示している。彼は言う、「[1]それが何であるかを意味表示する者は、[2]時には実体を、時には性質を意味表示している (*ho to ti esti sêmainôn hote men ousian sêmainei*)。…一人の人間[カリアス]が或る人の眼の前におかれるとき、そしてそこにおかれた者は人間であるとか動物であるとか言うとき、彼は[1]それ[カリアス]が何であるかを語り (*legei (states)*)、そして[2]一つの実体を意味表示している (*sêmainei (signify)*)」(103b27-31)。

意味論上の概念「意味表示する (*sêmainein*)」がこの文において二度使用されているのは、一つは「何であるか」を述べる言語行為を伝達するためであり、一つはその行為によって意味表示される実体を指示するためである。この二重の機能は『形而上学』においても見られる。「ある」は[1]何であるかそして[2]或るこれ (*tode ti*) を意味表示する」(Z 1 1028b12)。

「何であったかということ」が「何であるかということ」と「実体」の両者と共におかれるとき、前者は後者の二つをより厳密に限定する (91a25, b9, 26)。『トピカ』I 4-9 でアリストテレスは「Sは何であるか」の問いにより求められているものが何であるかを、アカデメイアにおける分割法との関連において展開されたプレディカビリアと述定の理論により究明されうることを確立した。定義形成句のみがソクラテスの求めた問いの応答を提供する。この意味において、本質 (*to ti ên einai*) は定義可能な存在者の形式的な概念として導入されている。

彼の HDE において「実体」は二つの方法で表現されるが、その一つは[Q2]により限定されたように、その単純な使用は[S1]独立した基体となる存在者を意味しており、そのもう一方は[S2]「或るものの実体」または「おのおののものの実体」というように属格において表現される事物に伴われるものである。

[S1] 独立した基体となる存在者 ([S1]:e.g., 90a10, b30, 91b9, 92a6, b13, 29, 93b26)

[S2] 「或る[おのおのの]ものの実体」 ([S2]:83b26, 90b16, 96a34, b12)

『形而上学』Δ 8 実体の語彙集においては [S2]= [Sb] 「基体について語られない事物における存在の根拠」としての「内在する構成(諸)要素」か、それとも [S2]= [Sc] 「何であったかということ(本質)」のいずれかを意味している (1017b15-23、なお [Sa]= [S1] (1017b13))。[Sc]は[Sb]と同じ様式において導入されており、「[Sc]これ[何であったかということ]は、その説明言表が定義であるところの[Sb]おのおののものの実体 (*ousia hekastou*) であると語られる」(1017b23)。彼の HDE において、アリストテレスが「あることの根拠である…実体」(90a9f)に言及するとき、実体の根拠は[Sb]「内在する構成要素」と[Sc]「本質」の両者に相応する仕方であり、しかも[Sc]が因果論的に解釈されるという

条件のもとで、それ自身実体でなければならない（実体と、実体としてのその根拠がエルゴン（実働）において分離されえない限り、実体の独立性規準を侵害しない）。

この対応は何故主語としての「端的な実体」と述語としての定義形成句は同一の存在者、即ち実体を意味表示し得るのかを説明している。仮に厳密な同一性述定が「人間は理性的な動物である」によって与えられるとして、[S1]「人間」と[S2]「理性的な動物」は実体を意味表示している。この主張の一つの証拠として、「おのおのの実体に内含されている要素 (*hosa en té ousia hekastou*)」(83b26) という一節を挙げることができる。[S2]はここでおのおのの事物は何であるかの述語により意味表示されている。彼が[S1]と[S2]を使用する理由は、これらは交換可能な主語と述語を述べているが故に、これら二つの表現における「実体」が同一の存在者（実体）を意味表示しているからである。もしこれが正しければ、われらは何故[Sa]独立した基体 S としての実体が[Sc]「Sは何であったかということ」と同一の存在者でありうるかを理解できる。また、[Sc]の内在的統体性の故に、それは本質を[Sb]「存在の根拠」として理解する可能性を開く。

アポリア諸章 II 3-7 で見てきたように、もし[A]定義と[B]論証が(1)と(2)、(3) (p.44 参照) に関して無関係であるならば、何であるかと実体の論証を持つ様式は何も存在しないであろう。その機能と範囲は制約されるであろう。まことに、実体を知るに至る方法を提供することのできない探求論は失敗に終わるだろう。残る問いはアリストテレスにとってそのような方法を提供することが可能であるかどうかである。

5. 何であるかの論証の論理学上および存在論上の条件

『分析論後書』II 8-10 において、アリストテレスは定義と論証は互いに無関係であるという想定を克服することによって彼の HDE の全体的な計画案を展開している。彼は何であるかの因果論的展開を遂行し、そして新たな定義の理論を創造する途上にいる。この連関において、彼はいかに論証が「何であったかということ」の意味における「何であるか」を把握することに寄与するのかを明らかにすることに専念している(93a19, 91a25)。II 8 において、アリストテレスは「Sは何であるか」というソクラテスの問いを因果論的に解釈する方法に基づき「Sは何であるか」を論証する論理的そして存在論的諸条件を提示している。彼は「Sは何であるかの根拠を知ること」という試みとしてこの問いに対処することにより展開する。彼は次のように述べる。

定義とは何か、また、或る仕方で何であるかの論証や定義があるか、それともいかなる意味においてもあらぬかという諸点について、われらはあらためて考察し直さなければならない。既に[II 2 90a19-23 において]述べた通り、(P)[II b]「Sは何であるか」を知ることと、[I & II b]「Sが何であるかの根拠[M]を知ること」とは同じことであるから、[(Q)]・(P)その理由は、何か或る根拠[M]があり、そしてこの根拠[M]は当の事物 S と同じものであるか、それとも別のものであるかのいずれかであり、

それが別のものであるとすれば、その事物 S は論証されうるものであるか、それとも論証されえないものであるかのいずれかであるが、そのとき、(R)もし根拠が別のものであり、そして[S が何であるかを]論証できるものであるとすれば、(S)その根拠が中項[M]であること必然であり、そして[S は何であるかにとっては]第一格において証明されなければならない。何故ならば、証明されるものは普遍的かつ肯定的なことではなければならないからである (93a3-9)。

この一連の推論は幾つかの仕方で解釈されよう。例えば、推論の連鎖 ((P)-(S)) において、Philoponus と Barnes は(Q)「或る意味で何であるかの論証が存在する」を(P)の結論として挿入している⁽⁵⁾。

$$((P \wedge P') \rightarrow Q) \wedge (R \rightarrow S)$$

しかし、Zabarella が解釈しているように「何も付けくわえるべきではなくアリストテレスの文は完全(*perfectam*)である」⁽⁶⁾。

$$(P' \rightarrow P) \wedge (P \wedge R) \rightarrow S$$

この何であるかの因果論的編成の基礎のもとに、アリストテレスは(R)を導く。それは「そのとき、もし(*ei·toinun*)根拠が別のものでありそして[S が何であるかを]論証することが[いやしくも]可能であれば」というものである。重要なことに、(R)は当該の可能性は条件的であるということ述べている。それは、実際、条件文の前件であり、それは彼がまだ(Q)にコミットしていないことを含意するが、それは何であるかの論証可能性の存在論上のそして論理上の条件を確立する過程においてある。(R)であるとするなら、三つの要素による結論(S)が導かれる。

この再構成のもとでは、アリストテレスの結論(S)は究極的に(P)によって正当化される。(P)は何であるかの因果論的編成により基礎づけられる。(P)に関して、しかしながら、われらはテキスト上の問題に直面する。この節の文脈によれば Bekker の読み：‘*to aition tou ti esti*’ (*BnAn^c*) は Ross の読み：‘*to aition tou ei esti*’ (*AB²dE^cP*, Zabarella, Waitz) よりも正しいに違いない⁽⁷⁾。ここでは何であるかを論証する形式的な条件を特定することが問題となっている。「それが存在することの理拠」(Charles, Zabarella)という意味での「それがある[か] (*ei esti*)」ことの論証は II 1-7 で既に確立されているので、条件付きの文(R)として述べられる必要はない⁽⁸⁾。基本の前提はソクラテスの「S は何であるか」の規定の下で、探求者は実際に「S があるかあらぬかの根拠」ではなく「S は何であるかの根拠」を求めていることである。アリストテレスは II 2 において[II b]「S は何であるか」の問いによって求められるものは、[I & II b]、即ち、「S が何であるか」の中項[M]を求めていること以外ではないことを確立した。そこでは彼は[II b]「調和音は何であるか」を問うことは[I & II b]「数の比は何であるか」を問うことと同じであるとしている(90a18-23)。II 8 おいて彼は HDE の一般計画が実行可能なものであることを示すべく、発見的探求の領域に形式的な制約を指定している。

6. 発見における情報の度合いと推論形成の並行過程

アリストテレスは続いて本質の論証の一つの候補クセノクラテスのロギコス推論が同一のものを同一なものにより証明する論点先取であると論じる(93a9-15)。同一律に基づくロギコス推論とは別に本質を論証する様式が存在しなかったならば、探求論は失速し停止するであろう。彼の理論を前進させるためには本質を含むものの因果論的転回を要する。彼は II 8 において「初めから」HDE のプログラムのもと何であるかの論証を探す新たな様式に乗り出す。このプロジェクトにおける彼の狙いは発見的探求と論証を統一し、一方論証を科学的探求の実行可能な方法とするなかで、発見的知識を科学的なものとするところである。発見的探求のゴールはなお例えば「雷」、「人間」そして「魂」の「本質」即ち「ものそれ自体」という意味における何であるかを把握することである(93a19-24)。彼は言う、

われらは[I a]「事実」を掴むことによって、[I b]「何故か」〔理拠〕を探求する。これらは時として相携えて同時に明らかになることもあるが、少なくとも[I b]「何故か」〔理拠〕を[I a]「事実」よりも先に知ることは不可能である。同様に、[II b]「何であったかということ(*to ti ên einai*)」をもまた[II a]「存在」を掴むことなしに知ることができないことは明らかである。なぜなら、[II a]「あるか」を知らずにいる者たちが[II b]「何であるか」を知ることができないからである。ところで、われらは[II a]「あるかどうかということ」を、或る場合には付帯的に掴んでいるが、或る場合には当の事物そのものに属する何ものか(*ti autou tou pragmatos*)を掴むことによって、掴んでいる。たとえば、それは、「雷」は「雲間の一種の音響である」、「蝕」は「光の一種の欠如である」、「人間」は「一種の動物である」、「魂」は「それ自身が自らを動かす者」というものである。かくして、われらが[II a]「あること」を付帯的な仕方知るところのものについては、われらはいかなる仕方においても[II b]「何であるか」を知るのに適した状態に置かれていないことは必然である。何故ならば、われらは、そのものが[II a]「あること」をすら知らないからである。ところで、[II a]「あること」を掴んでいないのに、そのものについて[II b]「何であるか」を探求することは何も探求していないことである。これに反して、[その事物そのものに属する]何ものか(*ti*)をわれらが掴んでいるものについては、容易である。したがって、[II a]「あること」をわれらがどのように掴んでいるかに応じて、われらが[II b]「何であるか」を知るどのような状態にあるかということも定まる。

かくして、その事物の[II b]「何であるか」に属する何ものかをわれらが掴んであるものの一つとして、まず次のようなものがあるとせよ。(1)「蝕」を A、「月」を C、「地球による遮蔽」を B とする。そのとき、[I a]「蝕を蒙っているかいないか」は B に関し[I & II a]「果たしてそれがあるかいないか」と探求することである。しかし、これは[I & II a]「その説明言表があるか」を探求することと何も異ならない。そし

てもしこれ[I & II a]があるなら、かのもの[I a]もあるとわれらは主張する。説明言表は矛盾のいずれかについてある、二直角を持つことの或いは持たないことのいずれかである。われらがそれ[説明言表]を発見する時、それが無中項なるものを通ずるのであれば、われらは[I a]「事実」と[I b]「理拠」とを同時に知る。[(2) 省略]…(3)「雷は何であるか」。「雲間における火の消去である」。「何故、雷が生じるのか」。「それは雲間において火が消されることの故である」。「雲」を C、「雷」を A、「火の消去」を B とする。C「雲」に B が属する。何故なら火がそのものにおいて消されるからである。これ[B]には A、「音響」がある。そして、まさに Bこそ初端の項 A の説明言表である。だが、これ[A]についてもふたたび他の中項があるとするならば、それは残された説明言表からのものとなろう (93a16-b13)。

最初に「事物そのもの」という一文がその事物において[II a]から[II b]への探求の全過程を支配するために導入されていることを確認する。というのも、この一文が「何であるか」への探求の究極のゴールを示す「何であったかということ (本質)」を示しているからである (93a19,22)。何故「魂」は他の事例とは異なり「一種の」という制約を含んでおらず、むしろ事物それ自体を意味表示しているかと言えば、魂がその本質と一致し「魂は何であるか」の一部を「魂は何であるか」の別の部分から分割する余地がないからである。この種の論証不可能な事物は、無中項によって意味表示されるが、中項によって媒介された諸項に分節され得ない(cf.1043b2-4)。それにもかかわらず、発見的探求の包括性を示すために彼はこの事例に言及している。

アリストテレスの新たな手順は探求の文脈において妥当な知識を生む当該の推論を組み立てることであるが、そこにおいて探求者は「何であるかの何ものか (*ti tou ti esti*)」や「事物そのものに属する何ものか (*ti autou tou pragmatos*)」を把握する。問われている諸項は「何ものか」を発見している度合いにより変化する (93a22, 29)。彼が導入している三つの事例に共通するものは、ひとは「何であるか」に属する「何ものか」を中項に置くべきであるということである。把握された中項の適応性に依存しつつ、提案された推論は成功した (また不成功な) 探求の一部分として判断される。もし推論が大項を伴う無中項の前提を含むのなら、それは成功した探求の一部である。

(1) の場合においてこれは無中項なるもの前提を通して構成されるので、[I b]と[II b]双方とも把握される。引用を略した (2) の場合では[I a]と[II a]のみが把握される。だからこそ探求者は[I & II b]の探求を進め、「[B は何であるか]、はたして地球の遮蔽か、月の回転かそれとも月の消滅かと探求することである」 (93b5) と続ける。(3) の場合に「雷」や「音響」という A 項の説明言表である他の中項があるだろう。項 A の内容はこの探求の段階においては探求される対象 (例、雷) かその類 (例、音響) のいずれかであり得る。これは探求者がすでにこの段階において「雷」を「雲間の一種の音響」 (93a22) と把握しているからである。実際の探求の現場の文脈に訴えることなしに、われらは諸項

の交換の議論を理解することはできない。B. Landor が述べるように、これらの項について語るとき「それらはかくして（われらは言うであろうように）あらゆる指示上透明な文脈において一方が他方に交換されうる」⁽⁹⁾。この置換を用いて、探求者は A 項をさらに適切に説明する別の項を発見することができる。(2) (3) は何であるかの適切な論証の究明における進行中の探求を示している。

何であるかの諸要素の区別は、いかに論証が探求の一部であり得るかを説明し、またいかに発見的探求が論証の制約によってガイドされうるかを説明している。これらの例が明らかにしているように、トラック[II]の[a]段階の発見の内に含まれる情報の度合いに注意が払われている。[a]段階を発見することにおいて得られる情報はひとをして「何であるか」を把握する段階である[b]に到達することを可能にする。「何であるかの何ものか」に彼は言及し A 項を説明する無中項の前提を発見することによって中項を構成することを目指している (93a22, 28, 29, 35)。「何ものか」は「何であるかの根拠」(93a4)における具体的な「根拠」によって特定されるが、それは成功した探求の例である。何であるかの論証は論証と発見的探求の相補性を通じて獲得される。

7. 論証可能そして論証不可能な存在者

何であるかを論証する形式的な制約の内側で、存在者は論証可能な存在者と論証不可能な存在者の二グループに区分され得る。論証不可能なものは「算術」における「一」のようなものであり、無中項や原理はそれらの根拠と同一である (93b24)。たとえひとがこれらの存在者が何であるかの論証を試みたとしても、せいぜいロギコス推論しか提供することができない。そのような存在者が何であるかを把握する他の方法がある。「定立 (thesis)」は論証されえない無中項の推論原理である (72a15-24)。「無中項なるものの定義は論証されえない何であるかの定立である」(94a9f)。当初定立として提示されている事物の不可論証的な知識をえることができる。幾何学における「大きさ」のような、その科学の論証されえない第一のものどもは、科学の演繹的体系の内部に生起していることにより、一種のフィードバック機構を通じて把握されうる。というのもそれらは第一のものとの諸特徴との関連で論証を認可するからである。探求者は科学の全体系がそれらに依存していることを把握することにより第一のものどもと無中項の諸事物の不可論証的な知識を得る。「すべての知識が論証されうるものではない、無中項の諸事物の場合には論証されえない知識が存在するとわれらは主張する」(72b18f)。例えば「一」に言及することなしに、ひとは最終的に数や算術の四原則といったその属性の知識を確立することはできない。

他方、その根拠が区別されている諸事物のあいだでは、或るものは論証することができ、或るものは論証されえない (93a6)。論証されえないものについて、彼はそれらの「付帯的諸属性」(90a11)を念頭に置いている。論証可能なものについては、「中項を持つものそして実体の何か他の根拠があるものどもについては、ひとは、既に述べたように、何であるかを論証することなしに論証を通じて何であるかを明らかにする」(93b25-28)。「実

体」はここで[S2]「本質」ではなく、むしろ[S1]独立した「基体」を意味する、というのも本質を演繹するあらゆる営みは *logikos* なものでしかないからである。[S1]「実体」はその根拠が判別されているものである独立した基体となる存在者を意味しているに違いない。II 8 における事例に従えば、見てきたように、「人」はそのような実体であるが「魂」はそうではない(93a23f)。かくして實際上分離されないが、説明言表において区別される実体の種類の場合には中項を捜さなければならない。これは望ましい帰結である、というのもし人間のような実体が純粹に論理学上の制約により探求の範囲から締め出されてしまったのなら、アリストテレスの HDE は魅力的な事業であることを止めてしまうだろうからである。

8. 因果論上統一する基礎的な特徴としての「何であったかということ」

II 11 において、アリストテレスは「何であったかということ(本質)」が根拠であると捉えられうると論じている。彼は自体的述定の二つの種類を含む中項として本質を捉えることにより論証を提供している。彼は半円における直角の数学上の証明を科学的な知識を得るものと認めている。彼は「われらが事物について科学的な知識をもっていると思うのは、われらがその事物の根拠を知る時である、そして根拠には四種のものがあり、一つは「何であったかということ」であり、もう一つは「或るものどもが存在するとき、これであること必然なもの」(94a20-22)と述べている。ここで「本質」を「統括因」、「或るものどもが存在するとき、これであること必然なもの」を「必然因」と呼ぶ。彼はその中項がこれら二つの根拠を満たす数学上の証明を提供している。

この連関において、彼は[I b]「半円に内接する角が直角であるのは何故か、即ち、どのようなものがある時に、これを条件として半円に内接する角は必然に直角であるのか」(94a28)を探求している。その論証は「二直角の半分」B、「直角」A、「半円に内接する角[事実上半円における三角形の一つの角]」Cにより構成されている。この論証は $A \phi \alpha B$ 、 $B \phi \alpha C$ 、そして $A \phi \alpha C$ となる(「 $A \phi \alpha B$ 」は「AはすべてのBに内属する」(全称肯定)を表す)。

この三つの項は事実上相互に同じものであるが、これは *logikos* な推論を構成していない。というのも本質の一つの説明言表を同じ本質の他の説明言表から推論しているものではないからである。同じ角が内属するところの基体は異なる。一方、結論「直角は半円に[において描かれた三角形の角に]内属する」は半円において描かれた三角形の固有性を表しているが、必然因 B 項は半円における角の本質として捉えられている。固有性 A が統括因(本質)から推論されている。必然因 B は、二つの二等辺三角形を描くことから得られるが、それは半円における当該の角を形成する。この事例において、固有な属性が統括因(つまり、本質)から演繹されている。この証明において明らかにされたことは、不定詞によって表現されている必然因 B は本質でもあるということである。「A(直角)が C(半円に内接する角)に内属することの根拠は B である。しかし、これ[B]は半円におけ

る直角であること (*tô en hemikukuliô orthên einai*) であった。しかし、これ[B]は [C における A の] 本質に等しい、というのもそれは [C における A の] 説明言表が意味表示するものだからである。さらに、何であったかということが中項であることによって根拠であることが証明された」(94a32-36)。不定詞「F であること」の名詞用法は、「F であることは何であったかということ」(F の本質)の省略形であり、ここでは統括因 B を意味表示する言い回しであるが、[I b]「何故半円にある角は直角か」という問いと[II b]「そのとき、半円における角にとって直角であることは何であったか」という問いを同一にする役割を担っている。[I b]に対する答えは「二直角の半分だから」によって与えられ、[II b]は「二直角の半分であること」によって与えられる。後者の答えは直接に半円における直角の本質を示している。

しかしながら、本質はただ単に *logikos* 様式において捉えられているのではなく、必然因の確立を通じて導入されている。かくして、彼は「これ (B=必然因) は何であったかということと同一である」と述べることによってこれらの根拠のあいだの同一性を表現している。彼は「同一」という言葉で、その知識は証明の過程を通じて得られたものの間の実際の同一性であることを強調している。彼は本質の因果論的解釈を「事物の「何であったかということ」は中項であることによって根拠であることが証明された」(94a35) と結論することにより明確にしている。この一文は本質は中項によって言及される根拠であり、そしてそのようにしてその具体的な因果論的説明のなかで必然因であることによって理解されうる。この論証は論点先取にはならない。何故なら C の固有性、すなわち A ($A \phi \alpha C$) は C に属する A の本質、すなわち B から推論されるからである。最終的に発見されるべき本質は、B の故に $A \phi \alpha C$ という様式において事物に内在する当該の全ての要素を統一している。

9. 結論：新しい定義論

ここまでアリストテレスが HDE 展開における彼の計画を遂行するその様式を辿ってきた。何であるかの因果論的編成は知識を産出する推論に基づき何であるかを把握する途を開く。彼は II 10 において「何であるかはどのように定義形成句へと分節されるか」という問いに取り組むことによって新たな定義論を展開している (cf.96a20)。アリストテレスは三つの型の定義形成句 (*horos*) の類型を導入しているが、それらのそれぞれが三つの型の定義の構成要素と「なるであろう (*estai*)」(93b30,94a1) ⁽¹⁰⁾ (この未来形表現は定義的説明言表はなお発見されるべきものであることを示している)。彼はそこでその定義形成句 (b') が「[I b]「何故か」を明らかにする説明言表」(93b38) と言われる因果論的な定義を明白に導入している。

かくして、(a') 最初の定義形成句は意味表示するが、証明することはないのにたいし、(b') 後者は言わば[II b]「何であるか」の論証のようなものとなる(esti)、[語の]配列において論証と異なっているが。というのも[I b]「何故雷は起きるか」と語ることに[II b]「雷は何であるか」と語ることは異なるからである。すなわち、かたや「それは雲の間で火が消されるが故にこの状態に(houtós)ある」と答えられるであろうが、「雷とは何か」と問われれば、それは[B]「雲の間で火が消されることによる音響である」と答えられるであろうからである。したがって、同じ言表が異なる仕方でも語られているのであって、この仕方では連続的論証(sunekês apodeiksis)であるが、この仕方では定義である(93b38-94a7)。

定義形成句(a')「名前や名前のような句が何を意味表示するかの或る説明言表(logos tis)」は[A]「無中項の定義は何であるかの不可論証的な定立」(94a11)を構成する⁽¹¹⁾。

定義形成句(b')「何故か」を明らかにする説明言表(93b38)は定義[B]「何であるかの論証のようなもの」を構成する。

定義形成句(c')類と種差の説明言表は定義[C]「何であるかの論証の結論」を構成する。「雷の定義形成句は「雲間における音響」である。しかしこれは何であるかの論証の結論である」(94a7f)。

定義形成句(b')は定義の一つの型、即ち[B]を構成しているが、それは「何であるかの根拠」として「何であるかの何ものか」の「何ものか」を規定することによって何であるかの全体性を提示するものである。何故「雷は起きるか」を語ることに「雷は何であるか」を語ることは諸項の配列において異なるため、(b')に基づく[B]の型の定義はただ「それが何であるかの論証のようなもの」と述べられうる。II 8で結論として本質を論証するという意味における何であるかの論証の可能性は退けられている。だがII 10において定義と論証の両者に含まれている「同じ説明言表」を指摘することを通して、彼はそれが何であるかの連続的(sunekês)論証として「許容される(endeketai)」(94a18)と主張している。この型の連続的論証は、事実上型[B]の定義の説明言表と同一である(cf.75b30f)。

[B]そして[C]は連続的論証によって実現されるので、(a')はただ算術における「一(単位)」のように科学の無中項の定義[A]にのみ割り当てられる(93b22-24)。その根拠が探求されているまさにその事物と同一であるものの種類を考察するとき、この型の定義[A]は全体としての論証科学全体としての諸活動を通じて得られる。このように、何であるかは三つの型の定義形成句に基づく定義の三つの型において並べられ、論証科学における適切な位置に配置される。これが、アリストテレスが彼の発見そして論証を結合した探求論HDEを展開するなかでいかに成功に導いているかの様式である。

註

- (1) D. Charles, *Aristotle on Meaning and Essence*, p.70 (Oxford 2000).
- (2) D. Charles, *ibid.*, p.71.
- (3) I. Philoponus, *Analytica Posteriora*, p.338, ed. M. Wallies (Berlin 1909), J. Zabarella, *Opera Logica*, p.1050 (Frankfurt 1608, 1966), T. Waitz, *Aristotelis Organon II*, p.380 (Lipsiae 1844), D. Ross, *Aristotle's Prior and Posterior Analytics*, p.610 (Oxford 1949), J. Barnes, *Aristotle Posterior Analytics*, p.203 (Oxford 1993), D. Charles, *ibid.*, p.70.
- (4) プレディカビリヤと述定の理論に関しては K. Chiba, *Aristotle on Essence and Defining-phrase in his Dialectic, Definition in Greek Philosophy*, pp.220-245. ed. D. Charles (Oxford 2010) を参照。
- (5) Barnes, *ibid.*, p.207, Philoponus, *ibid.*, p.365.
- (6) Zabarella, *ibid.*, p.1110.
- (7) Ross, *ibid.*, 93a4:ad.loc., I. Bekker, *Aristoteles Opera Tomus I*, ad.loc (Oxonii 1837), Philoponus, *ibid.*, ad loc. Ross は彼の MSS の伝承の議論のなかで、彼自身「B と n が最も重要な MSS (写本) である」と認めている (*ibid.*, p.89)。この言い回しはアリストテレスがプラトンのアイデアを他の事物にとってそれらの同一性の根拠であると認めるときに同様に用いられている:「一方アイデアは他の事物にとって何であるかの根拠であるが(*tou ti estin aitia tois allois*)、一はアイデアにとって根拠である」(*Met. I 6 988a10*)。
- (8) D. Charles, *ibid.*, p.180, Zabarella, *ibid.*, p.1110.
- (9) B. Landor, *Aristotle on Demonstrating Essence, Aperion*, Vol.XIX.No.2, p.130 (1985)。この論文で、Landor は Philoponus、Le Blond、S. Mansion、J. Barnes 等の注釈者たちの解釈における内的な首尾一貫性のなさを鋭く指摘している。しかし彼自身それらの問いを解決していない、というのも彼は本質を因果論的に基礎的な統一するものという解釈にコミットしておらず、また 93a4 の Bekker の伝承 '*aition tou ti esti*' を踏襲していないからである。
- (10) '*horos*' と '*horismos*' の区別については Chiba, *ibid.*, p.217-220 参照。II 10 の定義論に関しては以下参照。K. Chiba, *Aristotle's Theory of Definition in Posterior Analytics B.10, Journal of the Graduate School of Letters*, pp.1-17 Vol.3 2008. HP: <http://hdl.handle.net/2115/32407>.
- (11) 私は II 10 冒頭部を次のように読む。「定義は「何であるかの説明言表である」と語られるので、かたや、名前や名前のような句が何を意味表示するかの或る説明言表 (*tis logos*) はそれとなるであろう (*estai*) こと明らかである (*phaneron*)、例えば、「三角形」が何を意味表示するかは、それが三角形である限りにおいて、三角形は何であるかである。まさにそのもの[「三角形」により意味表示されるもの]が存在することを掴むことによって、われらは何故それがそうであるかを探求する。その存在をわれらが知らないものどもに関しては、しかしながら、それ[当該の名前が意味表示するもの]をこの仕方 (*houtós*) [何であるかの説明言表として]仮定することは困難である。困難の理由は既に述べられた [92b19-25]、すなわちそれが存在するか否かを付帯的にしか知らないからである」

(93b29-35)。私は 93b31: ‘*to ti sêmeinei, ti esti hê trigônon*’を Ross ではなく Bekker の text に従って読む。「仮定すること (*labein*)」(b32)に関しては、92b15-17:「幾何学者は「三角形」が何を意味表示するかを仮定した (*elaben*) が、彼はそれが存在することを証明する」参照 (cf. 76a33, 76b7, 71a12)。なお、*tis logos* の並行箇所として *Top.*102a5、*Met.*1030b8 参照。

付記 本稿は Aristotle on Heuristic Inquiry and Demonstration of What It is, *Oxford Handbook of Aristotle*, pp.171-201, ed. C. Shields (Oxford 2012) をもとにしています。